

れを機会に校長易培基の家では晩餐会を設けてわれわれ日本人三名も招待を受けた。こうして滞在一カ月余の間には学校の幹部や講師たちと、だんだん親しくなり見物に伴われたり、会食に招待されたり、その方も多忙であった。私の予定の期日が終って江湾を去ろうとした時は、生徒諸君が校庭に集って記念撮影をし、盛大な送別会を開いてくれた。

私がこの大学を去ってからまもなく、おいおい蔣介石一派の政治方針が変り、江湾の労働大学にも弾圧の手はきびしく伸びて、ろくろく講義も出来ない有様で、将来を嘱望された同大学はついに閉鎖されてしまった。私の講義を熱心に聴いてくれた青年達はたいして蔣介石一派の反動政策の犠牲になって殺されてしまったらしい。私が講義したのは蔣介石弾圧の前夜であったのだ。この学校の主事をしていた沈仲仇は学校の閉鎖と同時にドイツ留学を志し、その途中を日本に立ち寄り、私の家にも来訪してくれた。

十九 共学社と『ダイナミック』

私が昭和二年五月にこの千歳村に来たのは晴耕雨読の生活を打ち樹てたいと考えたためである。私はフランスで五、六年の間、主として百姓生活を勉強してきた。その少しばかりの経験を応用してここで新しい生活方式を樹てたら何程かの成功を勝ち得るだろうと考えたからのものであった。

たしか大正十五年の夏であったと思う。第一回の農民自治会の講習会を上高井戸の大西伍一君の家で開いた。大西君は小学校の先生であったが、社会問題にも深い理解と興味を持っておられ、上高井戸に古い農家を買求め、そこに農耕生活を始められた。土間をコンクリートにして、そこを教場に夏季講習会を始めた。その講習会がただ社会問題を論ずるばかりでなく、実際生活改善のことなどもなし、兎のフランス料理などを実習したことをおぼえている。日本では兎のたべ方を知らないもので、実にまずいものであったが、それが常識になっていた。私がフランス式の料理法で煮るとそれが非常にうまくたべられた。こんなことが因縁になって、この講習会に出席された鎌田研一夫人の紹介

で、千歳村の古い水車小屋を買受けて、そこに新しい生活の本拠を樹てようと計画した。幸いここに二反の土地も付けて借りることができた。そこで早速移転してきた。

先ず近所の長屋を借りて仮住居をしながら普請を急いだ。それは昭和元年のことであった。それより前、滝野川から阿佐ヶ谷に移転したが、そこには僅かに半年位しかいなかったと思う。この地は法律上では船橋村であったが、実際は八幡山に近かったので移転当時は通信も何もかもすべて八幡山としてきた。新しい家は隣家もなく林と畑に囲まれ、日中でも裏の林でフクロウの鳴く声も聞え、まったく淋しいところであった。まだ家など出来ない仮住居の時から毎週一回は、六、七人の男女が集まり、まことに純潔に熱心に共同研究を始めた。

いよいよバラックが出来上って、そこに移転したのは昭和二年の五月であった。移転祝をかねて同友の研究会を開いた時は、かなり嬉しかった。だがその祝の日から共働者の一人が痲癩を起して大波乱を演じ、祝も何も目茶苦茶になってしまった。最初はここに小さいながらも農園を作って同志と協力生活を試みようとしたのだが、それはすでに私自身の足元から破綻を生じてしまったのである。私の希望では、この近所に音楽家も来、画家も来、諸種の語学者も来て、いずれも独立自治して、半農的生活を営み、そして時々一所に会して各自の才能を發揮し、共学、共業、協力、共進するようにしたかったのだ。それから、こうした生活をする全国の同志が互いに連絡をとることをも予想した。しかるにその期待は見事に裏切られて、ここに多くの人の共同生活を始めるということは絶望に帰してしまった。それからせめて学問だけでも同志相集まって進めて行こうという考えに変わってきて、ここ

に共学社という看板をかかげるようになったのである。

最初の私の希望はその片鱗をも現わさずに変ってしまったが、一旦始めた百姓生活だけは維持したいと考えて、先ず覚えてきたフランス流の耕作を始めた。ところが何事を試みても、すべてうまく行かなかつた。ところ変れば品変る、気候風土がフランスと全然異なっている日本に来てフランス流の耕作をそのまま試みても、それがうまく行かないのは当然のことであった。こういう事業を起すには第一番に気候風土の研究から始めなくては駄目だということに気がつかなかつたのである。それに気付いたのは失敗した後であった。例えばキャベツを植えるにしても、フランスでは穴を深く掘って、肥料を詰めてその中に苗を植える。それはフランスのように雨の少ない所では当然のやり方であるが、日本のように世界無比の雨量の多い国では、失敗に終るのは当然であった。花キャベツなどはてんで花なぞつけず、下葉からだんだん落ちてひょうひょうと上方に延びて小さな葉をつけるに止まった。土地の人に教えられて少し浅く植えるとかかなりの花ができたが、それでもフランスのそのように大きくはならず、風味もまずくて問題にならない。りんごの木も植えてみた。カリンも信州の同志から苗を二、三十本送って貰って植えてみた。しかし何れも虫がついて、実はかたくて物にならない。ブドウの苗も百本ばかり取りよせて畑一面植えてみたが、それもフランス流の耕作方法ではうまくゆかなかつた。実はかなり収穫されたが、酢ばくてとてもたべられなかつた。ブドウ酒も造って見たが、そのブドウ酒たるや初めから酢味が多くて咽を通らない。こうして私の夢は殆んどすべての方面で失敗に終つた。

『ディナミック』の創刊が思い立たれたのは右の希望が挫かれた空虚を充たすためと、新しい歴史観に基づいて、新しい社会運動を起そうという野心に燃えたからであった。

当時神田豊穂君の春秋社が『世界大思想全集』の出版計画を樹てたので、私もその一部分たるブルードン及びオーギュスト・コントの翻訳を分担することになった。このコントの社会学は私の思想上に非常な影響を与え、引いては私の生活上にまで影響を及ぼすに到った。私が新しく発行に著手した『ディナミック』というリーフレットの名前もコントの社会学からとったものであった。もちろん私の思想の基礎をきずいてくれた人は、その前にエドワード・カアペンターがあり、エリゼ・ルクリュがあり、バクニンがあり、クロボトキンがあつた事は当然である。私が月刊の『ディナミック』誌を発行して、第一号の巻頭にかかげた文章に次のような一節がある。

解放の力学

今はディナミックの時代だ。どんなに小さな機械を建設し、運転するにも、第一に必要なことは力学の知識と其練習とである。況や大きな生きた社会を改造し、それを構成する数多き人類が解放されようといふには、各自が総合的 sociology の知識を以て其れを実行せねばならぬ。でなければ、古来の聖人達の教は何時までたつても行はれない。

各方面に於ける近代科学発達の結果、吾々は自身の生命とその活動をもディナミックに考察しや

うとする様になつた。社会力学あり、精神力学あり、天文力学ある所謂である。宇宙万物は超越的の絶対意思によつて支配されてゐるといふ思想は消え去つて、すべての生命は自発的の力として発展するものだと考へられるやうになつた。〔……〕

「人間は使命などは持たないが、併しただ力を持つ、力は、その存在するところに自分を表現する」といひ、「私は人を愛す、単に個人のみならず、各人を愛す……愛は私に自然であり、私を喜ばすが為に、私は愛する」と言つたスチルネルは人間をディナミックに見たのである。けれどもスチルネルは、その力を表現し、拡充するに當つて、その愛を充足するに當つて、施すべき方便を知らなかつた。力を感じながら、その力の法則と、その連帯性を見なかつた。

「幸福とは、人が自己の欲する一定の目的に向つて進むといふ意識にある。吾等の起源、吾等の現在、吾等の近き目的、吾等の永遠の理想を達観し、体現して、地球そのものと一体になり、また人類一体の意識をも確かり握り、人類や動物や植物やの各自の生活に適するやうにその環境を分配し整理し、吾等の庭園即ち地球面を耕作し、吾等を圍繞する陸と海と大気とを整頓する。乃ち此の如くにして始めて進歩は行はれるのである」というエリゼ・ルクリュの態度こそ、綜合力学的であるといへやう。

◇ そうだ幸福は理想郷にあるのではない。寧ろ自己の理想の為に努力する吾々自身の力進的生活そ

のものに幸福が存在するのである。これは幸福の力学的教訓だ。吾々の感激は、幸福は、光榮は、単なる観念的理想にあるのではなくて、その理想を体験し、生活し、行動する念力イデオロギクスの發展過程にある。常に宇宙万有とともに流転して止まない吾々の念力は、常に自発的に新しい形態を創造して宇宙の大綜合劇を進展させて行く。

この大綜合劇の一場面としての社会改造の事業には、それを進展する綜合的威力を認識して之を把握することが必要だ。マルキストと称する一派は些かこの点に着眼したやうにも見えたが、不幸にして彼等は、何時しか社会改造の第一目的たる「自由」の精神をかなぐり棄て、その上に弁証法といふ形而上学的ドグマに迷墮して了つた。



力は正義ではない。併しながら正義にして力なきは、案山子の持った弓ほどの価値もないものである。正義をして力あらしめる。それが吾々の仕事である筈だ。人を愛するスチルネルは、先づ最初に、その愛を以て、その愛の為に、社会的諸威力を綜合し把握せねばならぬ。大慈大悲はたんなる涙の享樂ではない筈だ。眞の理想は直ちにイデエ・フォルスとして自らを表現拡充すべきである。〔……〕

これによつても、こうした諸先輩の思想がここに綜合されていることが分るのである。この解放の力学に基づく私の仕事は一種の綜合的運動とならなければならないものであった。ヨーロッパのアナキスト連盟の綱領、宣言の中にも、サンジカリストの有名なアミアン綱領でも、この点では同じことを表明したものである。もちろん私の共学社の仕事は、この綜合的事業を全部担当してきたとは言えないばかりでなく、それは極めて一少部分の研究的方面を担当したに過ぎない。千歳村に来て最初に著わした『歴史哲学序論』の如きは、この点における私の建設の最初の一部をなしていると言えらるであらう。

共学社は月刊『ディナミック』を発行して、仕事の連絡及び研究の手段にすると同時に、種々のパンフレットを発行して啓蒙運動の必要を充たした。パンフレットは十二、三冊に及んでいるが、そのうち発行禁止になったものが二冊ある。それは赤羽巖穴の『農民の福音』とクロボトキンの『没落の代議政体』とであった。『ディナミック』誌そのものも満洲事変が勃発すると同時に政府の弾圧に会い、幾度か発売禁止の災厄に遭遇した。その発禁の一つの的になった文章に「満洲事変」〔本著作集と題するものがある。それを次に掲げておく。〕

満洲事変

満洲事変はまことに困つた問題である。欧羅巴の吾々の同志は、何れの機関紙に於ても日本軍の侵略行動を筆を極めて非難してゐる。併しそれだからと言って決して支那の軍閥を弁証してゐる訳ではない。人道の本義から單純に解決しようとするならば、満洲をして満洲人の自主自決に委すればよろしいのである。

然るに満洲の実状は非常に複雑である。満洲は支那本国の漢民族によつて顛覆された清朝発祥の地であり、昔の支那人は北狄と称して外敵の一に加へたところである。その満洲が革命以来、或は支那政府下の一部分である如く、或は独立国家でもある如くで極めて曖昧な関係にあつた。そこに以前から露国の勢力が根を下し、日露戦争後には日本が特別の勢力を占めるに至つた。その間には欧米諸国も屢々手を代へ品をかへて此地に関係をつけようと試みた。これを極東のバルカンと称するのはまことに妥当であるかも知れない。

x

併し吾々日本人にとつて、今日の事象をもう客観的にのみ見てはあられない。現に吾々の同胞は酷寒の地に於て、風雪と戦ひつゝ砲火の中に血を流してゐる。そしてその無残な犠牲者は皆有為の青年達である。この可愛い青年達の親達は決してその子を殺すために養育したのではない。而もその尊い犠牲は何のためになるか？これを単に帝国主義戦争、又は資本主義戦争と称して排斥することを止めて、国民生活自営のためである、として果して如何なる意味を持つてゐるか？今日の対満強硬政策が果して吾々日本民族の将来の繁栄の基礎となり得るか。それが問題である。若し今日の対満政策が吾々日本民族の繁栄を約束するものではないならば、今日吾々の兄弟達が惨憺たる犠牲を払ひつゝあることは全然無意義に終りはしないか。

近世の武装的商業主義、即ち帝国主義の大成者たりし英国が、今日は哀れむべき衰頹の状を呈しつゝあるに鑑みれば、わが国の対満政策は吾等の子孫のために除去すべからざる禍根を遺すものと云はれないか。而もそれが国民中の選手たる多くの有為の青年を犠牲にして行はれつゝあることを顧みる時、我等は二重にも三重にも大きな罪惡を犯しつゝあることに気付かざるを得ない。ジュネーヴの国際連盟理事国会議は今自由と平和の精神の漲つてゐるジュネーヴを去つてパリに開かれてゐる。そして多くの問題を秘密会議で決定しようとする。世界輿論の圧力に堪えかねたのである。勿論この輿論と称するものもプロパガンダを本旨とするチンドン屋の輿論には相違ないが、その輿論に対して堂々と闘ひ得ないところに暗黒面が存在する。国際的ブラック・チェンパに於て現像される画像が、どうせ豺狼狐狸の腐腸を綜合して造り上げられた擬人形に過ぎないであらうことは今から想像される。

日本の外交は、武力によつてのみ支持せられる。日本の外交は、かくて兎も角も成功したと言はれるであらう。吾等の子孫をして永く民族的苦患と恥辱とを嘗めしむるために。

(第二十六号 昭和六年十二月一日発禁)

この『ダイナミック』が発禁になつてから、政府の警戒の眼はようやく厳しくなつて来て、矢つぎばやに三回も連続して発売禁止がやつて来た。この時分から私の注意は漸く研究的の方面に向けられ、政府警戒の眼をさけるようになった。

『ダイナミック』の発行とともに私はパンフレットの仕事を続けた。そしてそれはかなりの成績をあげることができた。

その内、『土の権威』『土民芸術論』『弁証法的唯物史観の批評』『社会学としての無政府主義』『原始生活の回復』『無政府主義研究』『無政府主義とサンヂカリスム』等はいずれも初版を売りつくして再版を出し、中には三版まで売りつくしたのもある。

さらにこの内『社会学』と『無政府主義研究』とは、第二次世界大戦終結後に矢橋丈吉君の組合書店から、『弁証法的唯物史観の批評』は信州小諸の南沢袈裟松君が、それぞれ出版してくれた。

なおこの章を終るに当り『ディナミック』紙上の論説を一、二掲げておく。

国防の第一義

〔……〕

錦州占領がすんで満洲の軍事行動は一段落だと言つてゐる脚下から古賀騎兵聯隊の全滅が伝へられる。これから、また熱河まで進撃するのだと新聞紙は伝へる。何が一段落になつたのだ。却て是れから舞台は段々広くなつて行きはしないか。まさか、これで満蒙が全く平定したと思ふものはあるまい。満蒙の叛乱はこれから本格に組織的に民衆的に世界的に計画されるであらうと想像するのには間違つてゐるか。十八世紀の末に内乱に際して露、普、墮三国に分割されたポーランド国は、爾来百余年間露国革命運動の本源地となつたではないか。同じく露国のために征服されたコオカサス南方のシロージヤも亦同様ではなかつたか。一度分割されて百余年、ポーランド人の叛逆心は絶えず翻動として燃えてゐたが、かの世界大戦に乗じて遂に独立を回復した。日本は満洲を決して東洋

のポーランドたらしめてはならないだらう。併し、そうならしめなないためには、全然自由な自治制を満洲人自身に建てしめなければならぬ。そして、それは人間わざでは、急にはできないことだ。インドもエヂプトも、何時、イギリスの羈絆を脱するか、わからないといふ、どたんばに到着してゐる。歴史の示すところでは、英国の太陽は既に西方の空に傾いてゐる。

× 満洲にゐる、また、これから行く日本人が、祖国の権力から全然はなれて、真に満洲土着人と一体になつて、満洲の軍閥や政治家を駆逐して、自主自由の理想郷を建設するのならば、それは結構だ。無邪気な浪人なぞには、そうした思想を懐いてゐる向もあるやうだけれども支那の軍閥を駆逐するためには日本の軍閥が乗りだしたのでは何にもならない。戦つてゐる間の軍閥は純粹の軍人精神で動いてゐるが、後に政治行動になると一般の政治家と少しもちがはなくなる。政治は聖人も悪魔に化し、詐欺と瞞着とに権勢と榮譽とを捧げるものだからである。政治といふ現象がこの地球上に行はれてゐる限り、どんな革命が行はれ、どんな偉人が権力を握つても、結局はより狡猾な悪奸に克服されるより外にみちはない。それは五千年の人類の歴史が証明してゐる。それは人間が同じ人間を治めるといふ不合理反自然から由来する当然の結果なのだ。

× 満洲に同胞の屍を曝すのは傷ましい限りではある。けれども、死せるものをして死者を葬らしめよ。吾々は生きんとする同胞の上を考へなければならぬ。英国がインドによつて、エヂプトによ

つて、決して幸福も光榮も得なかつたと同様に、日本も亦満洲によつて榮譽も利益も得なかつたらどうか。併しまだ、それだけならば我慢もできる。インドやエヂプトの為に英国の蒙る今後のみじめさが想像されるにつれ、満洲の将来が日本に如何なる運命を与へるかを思つた時、生きんとする日本と日本民族とのために深刻な××××「危懼を抱」かないものはないであらう。

死靈の跳躍する満洲に鞏固な国境を造るか、または之を親善な隣邦とするか。今はいづれも難業であらう。

(第二十八号 昭和七年二月一日発禁)

また私は同号「千歳村信」で次のようにも書いている。

△世界の情勢は極めて重大性を帯びて来た。様々な重大問題が吾々の周囲に群がつて来た。吾々はその諸現象に対して徹底的の批判を下し、吾々自身のそれに対する確乎たる態度を決定し、積極的に歩を進めなくてはならぬ。社会人として此際徒らに因循姑息の生活を貪ることは許されぬことだ。吾々は今、世界人類が未だ曾て遭遇したことのない人道の危機に会してゐることに気付いた時、安閑としてゐることは大罪を犯すことである。起て全国の同志よ。

△人類の歴史が開始せられてから五六千年にはなるであろうが、今日ほど全世界の人類の運命に重大な危機を孕んだことは曾てなかつたであらう。即ち世界の人類はいま新しい機械文明の下に輻輳の奴隸となるか、それともこの機械を克服し強権を解消して、人類そのものが文化の主人公となるかといふ分岐点に吾々は逢着したのだ。

△今日俄かに強権を解消し得ぬとしても、機械を自治的民衆の手に奪還し、無強権の社会生活に向つて歩を進めることは容易である。然るに是れに反した方向に一般が向つてゐるのは、様々な虚榮の夢と我欲の錯覚とに迷はされてゐるからだ。〔……〕

フアツシヨ勝利の意義

独逸に於てヒットラーが政権を掌握するに至り、共産党も社会民主党も顔色なしといふ有様に見える。けれども共産党とフアツシヨとは何れも強権主義であり、その闘争組織でも全然同一型のもとに成立するもので、その間に些かも差異がないのである。思想の上から言へば、ボルシエギキはフアツシヨの先駆を勤めたのである。フアツシヨが勝つてボルシエギキが負けたのではない。ボルが露はらいたる役目を終へて、その後にはフアツシヨは乗り込んだのである。党派的關係から見ればボルは破れたに相違ないが、思想の上から言へばボルは大役を成就したのである。私は十年前から、フアツシズムとボルシエギズムとは同じマルクス主義から出た双生児だと主張してきた。(拙著『西洋社会運動史』参照)それが今日は益々明白になつたのである。

★

日本のボルシエギキも矢張り同様の役目を果した。一九二二年頃に隆盛であつた自由聯合主義に對するボルシエギキ並びに準ボルシエギキ——今日の殆んど總ての社会民主主義者、並びに共産党

を含む——の中央集権主義の理論闘争は、今日の日本のファッショ的反動勢力を勃興せしむべく、十年間の努力を捧げたのである。彼等は積年の努力が当に酬みられんとするを見て満足すべきである。

彼等の党派的観点から言へば彼等は漁夫の利をファッショに奪はれた如く感ずるであらう。それは彼等の愚昧不明を自ら告白するに過ぎないものであつて、吾々から言へば彼等は十年以来、今日の反动勢力を培養したのである。彼等は実に日本のプロレタリアを引きまゝとめて反動的強権に売り渡したのである。彼等は思想的意味から言へば大成功者であつたのである。彼等はこの歴史的使命を成就したのである。

レーニンはその破壊的目的を略ぼ成就した時、自ら反動の役割を引受けよう、と公言して忽然と独裁制を確立すべく全力を注いだ。独乙の強権的社會主義者等が、自らレーニンの役割に転身し得ない内に、その地位をヒットラーに奪はれたことは、党派的關係に於ては差異があるが、歴史のプロセスから言へば同一順序を経過したものである。この点に於て日本の強権的社會運動全体も矢張り独乙のそれと同一の役割を演じてゐるのである。

★

大声は俚耳に入らず、吾々は十年以来、今日あることを予言し、その警戒を絶叫したのであるが、これは狡猾なインテリの心を牽かず、蒙昧な大衆の耳に入らなかつた。今後十年は、強権主義が益益大衆の上に加はつて来るであらうが、彼等大衆が始めて眼さめるのは、彼等が奈落の底に突き落

された後であらう。

今日のファッショの運動方法を見ても、今日の軍部の宣伝方法を見ても、如何に彼等が国民大衆の野心を収攬しようかと腐心してゐるかが分る。そして其仕方は悉く従来の社會運動労働運動の模倣である。日本の強権主義的社會運動はまことに出藍の誉れある徒弟を得たといふべきである。されば日本の社會大衆党もボルシェビキも、若し其党派心を去つて真に自己の思想に忠実であるならば、今日のファッショ的傾向に対しては双手を挙げて喝采すべきである。

〔……〕

(第四十三号 昭和八年五月)